

## 灌頂儀礼

森 雅秀

### 一 灌頂儀礼とは

密教をそれ以前の仏教から際だたせるものに、その儀礼重視の立場をあげることができる。祭式至上主義をとるバラモン教に対抗して登場した仏教は、悟りに至るための瞑想や禪定のような個人的な実践を除いては、集団的な儀礼や儀式に対して否定的な立場をとった。受戒<sup>じゅがい</sup>のような加入儀礼は、僧団が設立された当初から行なわれていたが、そこでは比丘や比丘尼として不適格なもの排除することを主たる目的とし、形式化された行為 자체には積極的な意味を与えていない。

これに対し、しばしば密教は儀礼と結びつけて語られてきた。わが国でも加持祈禱は密教の専有物であつたし、護摩をはじめとするさまざまな修法は、密教伝来以来、今日に至るまで連綿と実践されてきた。そして、儀礼や儀式を「事相」と総称し、教理や思想を意味する「教相」と対等の位置にまで引き上げ、両者を車の両輪、鳥の両翼と呼びならわした。

密教のさまざまな儀礼は、それぞれが個別に存在しているのではなく、ある種のつながりを有している。特定の儀式はいくつかの儀礼の要素で形成され、さらに同じ儀式が、これらのまとまりを維持したまま、より大きな儀式を形成する。

入門儀礼である灌頂も、<sup>かんじゅ</sup>のような大規模な儀礼のひとつである。「灌頂」と漢訳された「アビシェーカ」(abhisēka)という語は、本来は「水を<sup>まき</sup>ぐ」と意味する。灌頂の儀式には、この灌水のプロセスが必ず含まれるが、それだけではなく、前後にさまざまな儀礼の要素が加えられている。また灌頂を行なうためにはマンダラが必要とされ、それ自体が複雑な階梯を含むマンダラの制作過程も、灌頂儀礼の一部に組み込まれている。

灌頂は弟子(sisya)が密教の教えを説く師すなわち阿闍梨(ācārya)の資格を得るために、その実修の最終的な段階で行なわれる儀式である。おそらくインド密教の時代には大乗仏教と密教が併存していたと考えられるが、密教の基礎的な実践をおさめ、所定の条件を満たしたものに灌頂は授けられた。

初期密教の一部の經典を除き、主要な密教經典には灌頂の作法が説かれている。これらを比較してみると、その方法は經典や時代ごとに大きく異なる。また灌頂のために用いられるマンダラについてもその前後に説明されることが多いが、マンダラそのものも經典や流派によつて異なる。灌頂は特定の經典を信奉する者たちに対し、その經典に説かれる方法で授けられ、その方法が後繼者たちにも順次伝えられていったと考えられるが、經典の

数が爆発的に増え、さらにさまざまな流派の分裂が起こった後期密教の時代には、一人の人物が複数の灌頂を受けることもめずらしくはなかつた。灌頂を受けることが、特定の密教の教えを学んだという、一種の免許のようになつたのである。

数ある密教儀礼の中でも最も重要な儀礼の一つである灌頂について、その起源や思想的な背景について述べたうえで、主要な經典に見られる灌頂儀礼の具体的な方法を概観し、時代による変化をたどることにしよう。

## 二 灌頂の起源

灌頂の起源については、古代インドの国王即位儀礼に範をとつたというのが、從来からの定説であった。しかし、具体的にその典拠となるような情報は、国王の即位式をあつかつた古代インドの文献、すなわちヴェーダ文獻などに見出すことはできない。たしかに、新しい王に水を灌ぎ、それによって特別な力が王に付与されるというプロセスは、即位儀礼の中に共通して見られるが、この灌水以外の部分で、密教儀礼の灌頂に一致する儀礼の要素はまったく見られない。

佛教文献にもはやくから「灌頂」の語は登場する。パーリ語仏典の一つで、仏教を支えた民衆の息吹を伝える「ジャータカ」(本生話)には、「灌頂」(Pali : abhisēka) の用例が数多くあるが、そのほとんどが国王の即位式をさす儀礼の名称として用いられている。ただし「ジャータカ」には具体的な灌頂のプロセスはほとんど述べられていない。

これらの用例で注目されることは、灌頂が国王の即位式ばかりではなく、王がその後継者を定め、それを周知さ

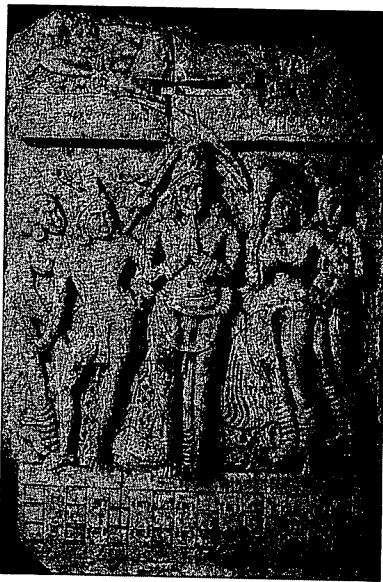


図2 転輪王 アマラヴァティー出土 大英博物館蔵



図1 王の行列 アジャンター第17窟

せるための儀式の名称としても用いられていることである。いわゆる立太子の儀式も灌頂と呼ぶのである。複数の男子の中から次王を選定することは、国王の重大な関心事であるし、それを公認のものとする儀式は、即位式にも匹敵する国家事業であったであろう。仏教徒を含む当時の民衆はこの儀式も「灌頂」の名で呼んでいるのである。

王が次王を選定し、これに灌頂を与えるという図式は、大乗仏教において、すべての修行階梯を終えた菩薩が、今生において仏となることを約束されることに投影される。代表的な初期大乗經典の一つである『華嚴經』には、インドの理想的な帝王である転輪王が、自分の後継者である太子を四大海水で灌頂することが、菩薩に対する諸仏の灌頂のモデルになっていることを示す記述がある。<sup>(1)</sup>転輪王は皇太子を白象と宝と金の座に坐らせ、周囲を幕で覆い、幘幡をたて、その内部で皇太子の頭頂に海水を金瓶から灌ぐという。転輪王に諸仏が、皇太子に菩薩が対応するのである。類似の記述は『十住經』<sup>(2)</sup>や『十地經』にも見られる。

菩薩の修行階梯の最終段階を、王の後継者に選ばれることになぞらえるのは、古くは『マハーヴアストゥ』(Mahavastu) に現れる。そこでは十の修行階梯、すなわち十住の最後の二つを「法王子住」「灌頂住」と名付けている。あたかも、王子の位につき、さらに王位繼承者としての資格が与えられるように、仏となることが約束されるのである。この十住の観念を整備して説くのが『十住經』であり、その思想は『華嚴經』にも色濃く現れている。また、菩薩の十の階梯を別の名称で説く『十地經』では、灌頂住に相当する第十地は法雲地と呼ばれる。名称は異なるが、これも灌頂とは無関係ではない。法すなわち真理が雲にたとえられ、この雲がもたらす雨は甘露であり、智慧そのものとされる。法雲地において智慧の波羅蜜を完成させた菩薩は、この智慧の甘露による灌頂を受け、菩薩の修行階梯のすべてを成就させ、仏になるのを待つのである。

『華嚴經』の「入法界品」において、主人公である善財童子は五三人の善知識に出会い、その教えを受けることによって、最終的に法王子の位に灌頂される。このほかにも『華嚴經』には「灌頂」の語は頻出するが、そのほとんどが、諸仏が菩薩のときにすでに灌頂を受けたという文脈で現れる。つまり、仏になるために灌頂が行なわれるというよりは、いにしえの菩薩の時代に仏は必ず灌頂を受けていたはずであるという前提で、仏になるための条件の一つのように扱われている。

仏となる菩薩が、その修行階梯の最後に灌頂を受けていなければならぬのであれば、釈迦も悟りを開く前に、すでに灌頂の儀式にのぞんでいたはずである。釈迦の場合、誕生直後に行なわれた灌水が、灌頂と見なされる。摩耶夫人の右腋の下から生まれた釈迦は、有名な七歩と獅子吼をなした後、ナンダ、ウパナンダの二龍王から冷水と温水を浴びて身を浄めた。この二龍灌水は、本来は一種の産湯であったのであろうが、密教儀礼としての灌頂のモデルと見なされる。灌頂儀礼において阿闍梨は弟子に対し、「誕生直後の仏が沐浴を行なつたように、瓶

の水で灌頂をするのだ」と、瓶の水を灌ぎながら語りかける。

これらの背景には、釈迦をはじめとする諸仏を精神界の帝王と見なし、これに理想的な君主である転輪王のイメージを重ね合わせようとする仏伝作者の意図がある。釈迦の誕生直後に占相を行なったアシタ仙によつて、釈迦が将来、仏陀か転輪王のいずれかになることを予言されたのは有名な話である。同じ予言は、摩耶夫人の托胎直後に行なわれた、白象降下の夢の占いにおいても示されている。

密教の灌頂儀礼の成立の理念的な背景には、菩薩が仏となるための最後の段階で灌頂がなされるという大乗仏教の菩薩思想と、その歴史的なモデルとしての釈迦、そしてこれらをつなぐ転輪王思想があるのである。

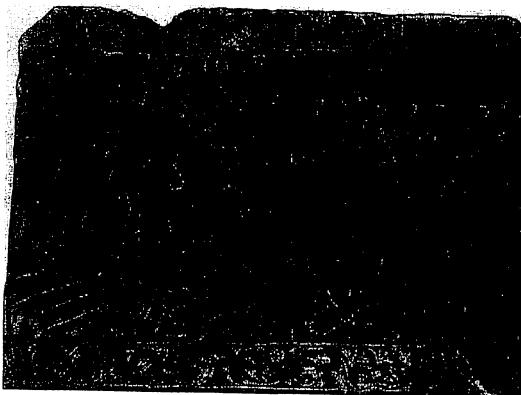


図3 アシタ仙による釈迦占相図  
ナーガールジュナコンダ出土 インド国立博物館蔵

### 三 中期密教の灌頂

弟子を対象とした密教の灌頂儀礼がいつ頃成立したか明らかではない。また成立時の灌頂の儀式がいかなるものであつたかも不明である。比較的初期の經典である『蘇悉地羯羅經』や『蕤呪耶經』には、すでにかなり複雑な灌頂の儀式が説かれている。そこではマンダラも灌頂儀礼のために準備される。

中期密教の代表的な經典の一つである『大日經』では、第二品「入漫荼羅具縁品」に灌頂の方法が詳しく説かれている。この章の前半では、大日如来を中心とするいわゆる胎藏マンダラの描き方が説明され、この

マンダラを前にして行なう灌頂の次第が後半において詳述されている<sup>(3)</sup>。

「具縁品」に説かれる灌頂の儀礼次第は大きく二つの部分に分かれる。はじめは投華得仏と呼ばれる部分で、灌頂を受ける弟子（受者）が目隠しをしたままマンダラに花を投げる。花の落ちた位置から弟子の守り本尊が決定される。二つめが受者に水瓶の水を灌ぐ狭義の灌頂の部分である。

投華得仏では、目隠しをした弟子は門の近くに立ち、そこからマンダラに向かつて花を落とす。花の落ちた場所に描かれている尊格が、密教行者としての弟子の本尊となる。投華の後には阿闍梨は弟子の目隠しを取り、マンダラを見せ、さらに花の落ちた尊格の印とマントラを弟子に授ける。

投華得仏の目的は、弟子がマンダラの中のどの尊格と関係があるかを明らかにすることにあるが、本来は独立したプロセスであつたと考えられる。投華得仏の最後に息災の護摩と、弟子から阿闍梨への布施が行なわれるが、これらは儀礼の終結部におかれるのが一般的である。なおわが国では「結縁灌頂」の名で、在家の信者も対象に投華得仏は行なわれている。仏縁を結び、自己にそなわる仮性に目覚めるためといわれている。インドにおいても同じ目的で広く行なわれていたのであろう。

儀式の後半である狭義の灌頂に相当する部分は、灌頂のために特別の場を作ることから始まる。經典では第二壇と呼ばれ、灌頂のための壇であるため灌頂壇という名称ももつ。壇の中央には八葉の大きな蓮華が描かれ、四方の蓮弁には四つの宝瓶<sup>(4)</sup>が安置される。受者である弟子はこの蓮華の中央にとどまり、さまざまな供養を受けれる。そして美しい音楽の演奏や吉祥な詩歌の誦唱も行なわれ、心に喜びを覚えた状態で宝瓶の水で灌頂を受ける。この灌頂は阿闍梨によつて行なわれるが、同時に諸々の如来によつてもなされると『大日經』は説く。

弟子に水を灌ぐ灌頂そのものはこれで終わるが、儀礼全体ではいくつかのプロセスがこれに続く。阿闍梨は弟

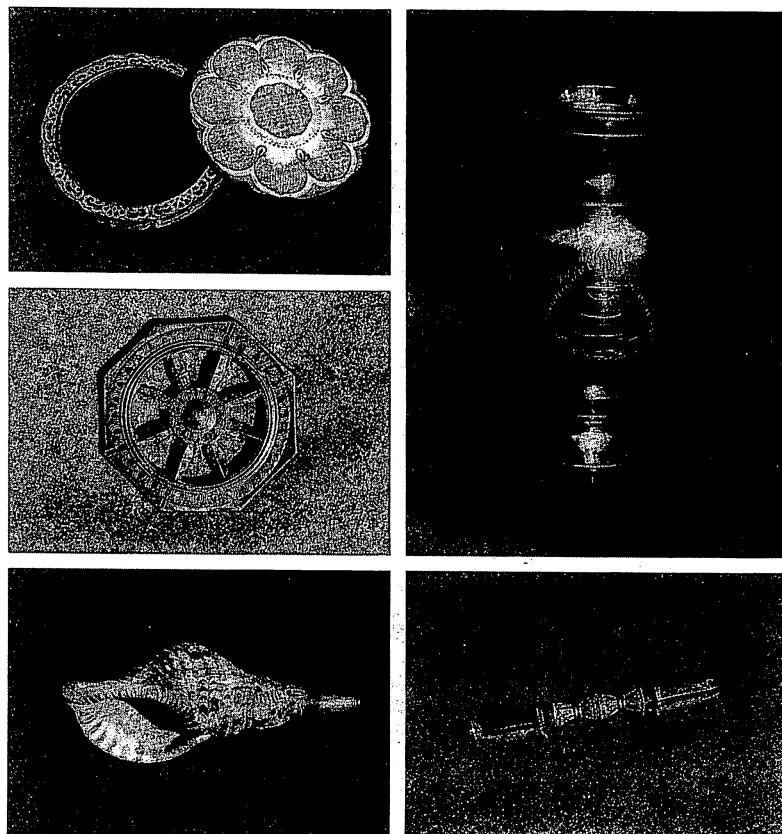


図4 日本の灌頂で用いられる諸道具 高野山親王院蔵  
灌頂瓶 [右上]、開眼作法に用いる金箆 [右下]、鏡 [左上]、輪宝 [左中]、法螺貝 [左下]

子に衣や香、花などを再び供え  
た後、金でできたへらのような  
道具で弟子のまぶたに触れる。  
この所作は医者が目の病を治す  
ように、弟子の目を覆った無知  
という膜を阿闍梨が取り除くと  
説明される。続いて阿闍梨は鏡  
を手に取り、弟子の前に示す。  
これも、すべての存在物は鏡に  
映った姿のように実体がないと  
いうことを弟子に悟らせるため  
に行なわれる。無知の覆いが取  
り除かれた弟子が、真理を見る  
ことができるようになったこと  
を象徴的に示すのである。さら  
に弟子は阿闍梨から法輪と法螺  
貝が与えられる。法輪を回すこ  
とも法螺貝を吹くことも法を説

くことを表し、いざれも仏法そのもののシンボルとされる。この後、阿闍梨は弟子に傘蓋さがいを掲げてマンダラの周囲を回り、最後に護摩を焚き、弟子からの歓待や布施を受ける。

次に、中期密教に分類され、後世のインド密教に決定的な影響を与えた『真実摂經』(『初会の金剛頂經』)の灌頂を見てみよう。ここでも投華得仏と狭義の灌頂は受け継がれているが、『大日經』には見られなかつた要素もいくつか登場している。

その一つは投華得仏の中に組み込まれた「誓水の授与」と呼ばれるプロセスである。ここでも弟子は投華に先立ち、覆面をし、手に花を持つ。こうして投華の準備をした弟子に向かって、阿闍梨はマンダラについて口外することを繰り返し禁じ、さらに、弟子にとって阿闍梨が金剛手であることを宣言する。これによつて、阿闍梨と弟子の間に新たな関係が樹立する。

続いて儀式は投華得仏の流れに戻り、弟子は目隠しをしたまま、手にした花をマンダラに投げる。『真実摂經』によれば、花の位置に従つて弟子の成就の種類や度合いが判定される。そして、目隠しを解かれた弟子は初めてマンダラをまのあたりにし、阿闍梨からマンダラの解説を受ける。またマンダラを見ることによつて得られる功德も語られる。

狭義の灌頂に相当するプロセスにもいくつか新たな要素が現れる。初めに行なわれるものは瓶灌頂びとうかんぢょうで、弟子はマンダラを見ながら阿闍梨から水を灌がれる。続いて阿闍梨は弟子に五鉢の金剛杵こんごうしょを与える。金剛杵はすべての仮の本性を表し、弟子はそれを手にするのである。この部分は金剛主灌頂と呼ばれる。さらに阿闍梨は弟子に金剛名灌頂を行なう。灌頂によつて新たな生を受けた弟子の命名式である。經典には具体的な名称は示されず、おそらく投華得仏で花の落ちた場所の尊格に従つた名称が弟子に与えられたのであろう。

『真実撰經』本文の灌頂の説明はこの金剛名灌頂で終わるが、八世紀の学匠アーナンダガルバによる金剛界マニダラの儀軌書『一切金剛出現』(Sarvavajradaya)は、さらに金のさじによる開眼、鏡の提示、法輪や法螺貝の授与といった『大日經』でも灌頂の後で説かれた一連の行為に触れている。<sup>(4)</sup>『真実撰經』の想定した灌頂に実際にこれらのプロセスが含まれていたかは明らかではないが、『真実撰經』以前の灌頂の伝統がインド内部で継承されていたことは確認できる。

『真実撰經』に説かれる灌頂は、『大日經』以来の枠組みや儀礼の要素をおおむね保持しながらも、新たな要素を加味して儀礼の拡大がはかられている。とくに誓水の授与や金剛名灌頂が加えられることによって、誕生儀礼、あるいは再生儀礼としての性格が強く打ち出されることになる。

#### 四 後期密教における展開

後期密教の時代になると、それまでと同様に弟子の入門儀礼という目的をもちながらも、灌頂の儀式は大きく様変わりすることになる。この変化は四種の灌頂への整備と見なすことができる。四種の灌頂とは①瓶灌頂、②秘密灌頂、③般若智灌頂、④第四灌頂である。この体系は、代表的な後期密教経典の一つである『秘密集会タントラ』において成立したと考えられている。

初めの瓶灌頂は水、宝冠、金剛杵、鈴、名の五つのプロセスに分けられる。水灌頂が水瓶による灌水で、宝冠、金剛杵、鈴はそれぞれ名称となっている宝冠などを弟子に与える。終わりの名灌頂は前と同様、命名式である。水と金剛、名の各灌頂は『真実撰經』にも見られた。教義的にはこれらの五種の灌頂は五仏、すなわち阿闍梨、宝

生、阿弥陀、不空成就、大日に順に対応し、この五仏に象徴される五種の智恵（五智）がこれによつて弟子に与えられるため、明灌頂とも呼ばれる。なお投華得仏はこれらの五種の灌頂に先立つて行なわれ、文献によつては花輪の灌頂とも呼ばれる。

第二の秘密灌頂と第三の般若智灌頂は、性的なヨーガを伴つたプロセスである。いざれも女性パートナーが儀式に加わるが、これはあらかじめ弟子によつて阿闍梨に献上された女性である。また実際には女性は加わらず、観想の中だけで実践されることもあつた。

秘密灌頂においては阿闍梨は女性のパートナーと交わり、自分自身の金剛杵から菩提心を取り出し、受者である弟子の口中に入れる。この場合、金剛杵とは男性性器で菩提心は精液をさす。これによつて弟子に菩提心が植え付けられるのである。第三の般若智灌頂においては、阿闍梨にかわつて弟子が女性パートナーと性的な交渉をもつ。これによつて「般若の大樂」を弟子は享受する。

これらの灌頂をどのように評価するかは研究者たちでも意見が分かれ。単に「性への執着という毒を薬にかえてその修習をする」という見方もあるれば、インドの先住民族に伝わる習俗が残存したという説も示されている。<sup>(5)</sup>もちろん、性的なヨーガは仏教の立場とは両立しえない方法であるため、すでに述べたように、実際の女性を用いずに修習する方法も示され、後代のチベットではそれが主流になる。女性パートナーとの単なる性的な交渉ではなく、行者の身体にある脈管や神経叢、そこを流れる氣息などに関する精緻な生理学的理論を伴つていることも強調される。

全体の最後におかれる第四灌頂は、『秘密集会タンントラ』そのものには具体的な方法は示されていない。後世の注釈書や儀軌類では「言葉による灌頂」であるとされ、阿闍梨から弟子への秘義伝授と見なされている。それ

までの段階の感覚的な三昧を、精神的な三昧へと変換させることを目的とし、一連の灌頂儀礼を完成させるプロセスとして位置づけられる。

インド密教の最後を飾る『時輪タントラ』においても、四種の灌頂の体系は保持されているが、瓶灌頂に相当する部分を水、宝冠、布帛、金剛杵鉢、尊主、金剛名、許可の七段階に分け、これに「世間の灌頂」という名称を与えた。低レヴェルの灌頂と見なしたのである。これに対して、瓶、秘密、般若智、第四の四種を高レヴェルの灌頂として「出世間の灌頂」の名で別に立てた。四種の初めにあげられる瓶灌頂は従来までと同じ名称であるが、内容は異なり、瞑想を主体とした後期密教にふさわしい行法となっている。<sup>(7)</sup>

おそらく後期密教の時代には、四種の灌頂の体系に基づきながらも、『時輪タントラ』に見られるように、依拠する經典や学派によってそれぞれ異なる方法で灌頂が行なわれていたのであろう。後期密教を代表する学匠のひとりアバヤーカラグプタ（一世紀後半～二世紀前半）は、その主著『ヴァジュラーヴアリー』（*Vajravali*）の中で、これらの異なる灌頂の方法を検討した上で、統一的な方法を示そうとした。その儀礼の全体像はきわめて長大で、さまざまな要素から構成されているが、そこでは四種の灌頂のシステムに従いながらも、『大日經』や『真実經』などの古い時代の經典に含まれていた灌頂の基本的な要素が保持されている。<sup>(8)</sup>

## 五 おわりに

これまでに示したインド密教における灌頂の流れは、『大日經』に見られた投華得仏と水瓶による灌頂によつて構成された儀式から、『真実經』で示された再生儀礼の性格の強化を経て、性的なヨーガに重点を置いた後

期密教における四種の灌頂への転換と、概略的に示すことができる。そして、前の儀礼の要素を捨てることなく、これに新たな儀礼の要素を次々と積み重ねることによって、儀式に質的な変化を与え、儀礼全体も肥大化させている。そこでは、本来の灌頂儀礼の中心に置かれていたはずの瓶による灌水は、儀式全体から見て「よく一部を占めるにすぎない」。

密教の儀礼の中でもとくに灌頂は秘密性が重視された儀礼である。わが国の密教寺院でも、灌頂（伝法灌頂）の儀式は公開されず、写真や映像に収めることも厳しく禁じられている。秘儀の中の秘儀なのである。このような性格は、マンダラや儀式について口外することを強く戒めた『真実撰經』にすでに認められる。さらに性的なヨーガを含む後期密教の灌頂では、秘密灌頂から第四灌頂までは、阿闍梨と弟子、そして女性のパートナーのみを幔幕などで囲み、儀式を補助する僧たちの目からもさえぎった。幔幕の中の弟子自身も「信仰を失うおそれがある」ために目隠しをするように定められている。

しかし『大日經』やそれ以前の經典に説かれる灌頂儀礼からは、このような秘儀的な雰囲気を読みとることはできない。そこでは周囲の僧侶たちが楽器を演奏し、吉祥な歌を唱和するという祝祭的な気分にあふれている。灌頂の舞台も幟や幡を立てて莊嚴され、そこに準備されるマンダラも、仏の住居を描いた豪華な宮殿の姿である。受者である弟子は、それまでの修行の過程を終え、これから阿闍梨として出発する華やかな儀式として灌頂の儀式にのぞんだはずである。それは、国王の即位式や立太子の式にふさわしい莊嚴なものであつたであろう。灌頂の儀式の最後の段階におかれる受者によるマンダラの周回は、仏として莊嚴された受者が、阿闍梨本人によつて掲げられた傘蓋のもとで歩む、榮誉ある姿を誇示するための行為なのである。時代によつて新たな要素が加わり、いかに秘儀性が高められても、灌頂儀礼の基調をなすのは、このような祝祭的な性格であつたと考えられる。

註

- (1) 大正藏一〇卷、一一〇大頁上。
- (2) 大正藏一〇卷、五一九頁上中、五六八頁中下。
- (3) 大塚、一九九三。
- (4) 密教聖典研究会、一九八七、七三一八〇頁。
- (5) 山口、一九八八、一一一四頁。
- (6) 田中、一九九四、一一七一—一八頁。
- (7) 田中、一九九四、一一一—四五頁。
- (8) 森、一九九七、一六七—一六九頁。

参考文献

- Einoo, S., ed., 1999, *Toward a Pratisthā*, Manohar, Delhi.
- Heesterman, J.C., 1957, *The Ancient Indian Royal Consecration: The Rājasūya Described according to the Yagus Texts and Annotated*, Mouton & Co., The Hague.
- 大塚伸夫、一九九三、『大口縫』の曼荼羅行』『密教学研究』二五、八五一—一三三頁
- 桜井宗信、一九九六、『イハニ密教儀礼研究——後期インド密教の灌頂次第』法藏館
- 田中公明、一九九四、『超密教時輪タントラ』東方出版
- 密教聖典研究会、一九八七、『Vajradhātumahāmaṇḍalopapāyikā-Sarvavajrodaya——梵文テキストと和訳——(二)
- 元』『大正大学綜合仏教研究所年報』九、一一一八五頁
- 森 雅秀、一九九七、『マハタントラの密教儀礼』春秋社

森 雅秀、一九九八、「密教儀礼の成立に関する一考察」『インド密教の形成と展開』（松長有慶編）法藏館、三〇五一

三二八頁

山口瑞鳳、一九八八、『チベット（下）』東京大学出版会

## インド密教 <シリーズ 密教 1>

1999年5月28日 第1刷発行

---

編 者 立川武蔵／頼富本宏  
発 行 者 神田 明  
発 行 所 株式会社 春秋社  
〒101-0021 東京都千代田区外神田 2-18-6  
電話 03-3255-9611（営業）  
03-3255-9614（編集）  
振替 00180-6-24861  
装丁者 本田 進  
印刷所 新興印刷製本株式会社  
製本所 徳住製本株式会社

---

© Printed in Japan 1999  
ISBN 4-393-11211-3 定価はカバー等に表示しております